

つなぐもの つながるもの



皆さんは人と人をつなぐものは何だと思えますか。それは学校だったり、地域だったり、人をつなぐ環境はさまざまあると思いますが、実は緑のカーテンも人をつなぐ力があるのです。菊陽町の南方地区から広まったこの取り組みを知り、自ら動いた人たちがいます。緑のカーテンから、新しいいまちづくりがはじまっています。

涼しさを生み出す知恵

今年も全国各地で猛暑が続き、太陽が沈んでもなかなか涼しくなりません。それは、夏の強い日差しによって家やビルなどの外壁やベランダ、アスファルトが暖められ、そこに物体が暖められると熱を蓄える「蓄熱」という作用が働くためです。これを少しでも改善するにはどうしたらよいのでしょうか。

そこで注目されたのが「緑のカーテン」です。昔から受け継がれてきた打ち水や日よけをより自然に、より楽しむ知恵が生まれました。

緑のカーテンの利点は、家の外で日差しを遮ることができること。植物は生きているので、根から吸い上げた水分が葉から蒸発する蒸散作用があります。そのときに周りの熱を奪い冷却効果を起こすので、外壁やベランダが暖まりにくくな

り、部屋の温度上昇が抑えられるというわけです。特に暑い日には、緑のカーテンだけでは十分ではないにしても、部屋の中のカーテンと合わせることで、よって、いつもよりエアコンで部屋を冷やさなくてもよくなります。

そして涼しさを生み出す知恵は、その効果と見た目の涼しさも相まって、だんだん広がりを見せつつあります。



▲部屋の中から見た緑のカーテン。木漏れ日が差し込む。

伸び続ける緑の架け橋

南方地区の紫藤さんご夫妻が緑のカーテンを始めたのが平成18年のこと。今では南方地区を飛び出し、その取り組みが注目されています。

昨年、南方地区の有志でつくる「みんながたグリーンクラブ」が環境省主催の「ストップ温暖化『一村一品』大作戦」全国大会で審査委員特別賞を受賞されました。このことを「広報きくよう」でお伝えしたことが、町の人たちが緑のカーテンを知る一つのきっかけになりました。

そのときの「広報きくよう」を見た光の森地区の二つの家庭が「どのようにしたら緑のカーテンをつくれるのか」と興味を持ち、紫藤さんに連絡を取りました。この行動を起こしたことで紫藤さんと出会い、ゴーヤの苗をもらって植え方やネットの張り方などを一緒に取り組みました。今年はそのそれぞれの家庭で材料などを準備し、緑のカーテンをつくられています。

さらにそのつながりは県外にも広がります。8月6日、佐賀市環境保健推進協議会が南方地区の緑のカーテンの視察研修に来町されました。佐賀市でも、環境に関するさまざまな取り組みが行われており、同協議会で地球温暖化防止対策の取り組みをしている所を探していたところ、NPO法人くまもと地球温暖化対策

センターからの紹介で南方地区を知ったそうです。

視察研修では、紫藤さんから緑のカーテンについて南方地区の事例発表があり、質問が飛び交いました。また、地区の緑のカーテンを視察し、その効果を肌で実感されました。

町も昨年から23の公共施設で緑のカーテンづくりを始めました。今年も緑のカーテンが青々と茂り、ゴーヤのカーテンはたくさんの実をつけました。そこで、役場で実ったゴーヤを、高齢者宅などに弁当を届ける町社会福祉協議会に提供。ゴーヤ料理入りの弁当が高齢者の家に配られました。

このように、人をつなぐきっかけになったのは緑のカーテンでした。しかし、つながることができた最大の理由は、「気づき、そして積極的に動いたこと」ではないでしょうか。この人たちは動かなければ何も始まらないことを知り、挑戦し、出会い、そしてつながることができたのです。



- 1 窓の外を覆う緑のカーテン。家の外で日差しを遮ることができる。
- 2 役場でつくった緑のカーテンからとれたゴーヤを弁当に入れて高齢者世帯へ届ける町社協職員。
- 3 緑のカーテンの内側に入り、その効果を肌で感じる視察研修の参加者。
- 4 役場で植えたゴーヤのカーテン。覆い茂りたくさんの身をつけた。



▲「みんながたグリーンクラブ」の皆さん (2009年4月号掲載)

Interview

緑のカーテンからつながった人たち。
そのきっかけと、それぞれの思いを聞きました。

しとう えいじ
紫藤 英二さん
かずよ
和代さん (南方)

楽しくみんなでやれるのが一番。

緑のカーテンはつながりをつくる材料です。家族や周りの人の協力がないとできません。やってみたくてできない人は遠慮なく声を掛けてください。一緒に手伝いますよ。そうすることで、また一つ、つながりができます。いまや、わたしたちの生きがいづくりにもなっている緑のカーテン。育てるのも、人に教えるのも、アイデアや知恵が広がるのも楽しいですし、なによりみんなと楽しく過ごせます。今後はできた種から苗に育て、住民レベルで緑のカーテンを広げる会をつくり、広められたらいいなと思っています。



かわ なみ まこと
川並 諒さん
くにこ
邦子さん (光の森地区)

誰にでもできる楽しみがある。

夏場は日差しが強いのでいつも部屋のカーテンを下ろし、エアコンを使っていました。しかし、広報で「緑のカーテン」を知り、どうしたらつくれるのかと思って役場に電話したところ、紫藤さんを紹介してくれました。昨年は紫藤さんから苗をわけてもらい、いろいろと指導してもらいました。今年は自分たちでつくっています。部屋から見る緑のカーテンはとても癒しを感じさせてくれます。ご近所さんとも「緑のカーテンが大きく育っていますね」など会話が広がりました。



さかき じゅん
佐賀市役所環境下水道部環境課副課長
兼温暖化対策室長
こが ひろし
古賀 宏さん

自発的な取り組みと独自性が高い。

佐賀市では、地球温暖化防止のため、緑のカーテンを進めています。4月下旬からゴーヤ、キュウリ、アサガオの種などを無料配布しました。9月には「グリーンカーテンコンテスト」も開催します。今回、南方地区の緑のカーテンの取り組みをみて、住民の皆さんが自発的に取り組まれているのは素晴らしいと思いました。ゴーヤジュースなども飲ませていただきましたが、その独自性もいいですね。地域で緑のカーテンを広めていくのに、とても参考になりました。



おち
越智さん (光の森地区)

今年はもっと上まで伸ばしたい。

ずっと家には西日が差し込んでいて暑くて困っていました。そんなとき、広報やCMで緑のカーテンを知ったんです。どうやったらつくれるのかと思い役場に電話したところ、紫藤さんとお会いすることができました。昨年は紫藤さんから苗をわけてもらい、指導していただきましたが、今年は昨年使った材料を再利用し、自分たちで準備してつくりました。できたゴーヤは近所の人たちに配ったりもしています。今年は日よけの上まで蔓が伸びるようにしたいですね。



蔓がつながるように人と人がつながっていく

「気づき、そして積極的に動いたこと」。今回、緑のカーテンがきっかけで人と人のつながりは、まさにこの言葉に集約されます。「気づく」だけでは足りない、単に「動く」だけでも足りない。この2つはそろってはじめて大きな意味をなすのです。光の森地区の二つの家庭は、まさにこの二つがそろったことで自ら動き、紫藤さんと出会うことができました。このほかにも、町内を見渡すと緑のカーテンをつくられている家庭を目にします。皆さん、環境のことや経済的なこと、さまざまなことに気づき、すでに動かれていることが分かります。このようなことは、緑のカーテンだけでなく、他の取り組みでも見られます。例えば、最近では買い物をするときに、マイバッグを利用する人がよく見られるようになりました。これも、わたしたち一人ひとりがマイバッグ利用者を見て、「わたしも環境のために使おう」「節約のために使おう」と気づき、動いたことで広がっているのではないのでしょうか。

「やってみよう」と思うきっかけから一歩踏み出すのは勇気がいることかもしれません。何を取り組むにしても、最初はほとんどの人が迷いや不安を持っていきます。そんなとき、手探りで伸ばした手をつかんでくれる人、頑張っている人の存在は、とても大きいものです。町にはボランティアでも、子育てでも、頑張っている人がたくさんいます。少し勇気を出して手を伸ばしてみよう。この町には、手をつかんでくれる人がきっといます。わたしたちが動き、つながれば、いろいろなものを創っていくことができるのです。そして頑張る人が増えれば、菊陽町はもっと元気に、もっと良い町になることでしょう。緑のカーテンの蔓がつながるように、私たちもつながり、一歩踏み出しましょう。わたしたちの「まち」のために。

